

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

2015 graph magazine vol. 38

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 38 定価100円（税込み）

Unser HERR lebt
主は生きておられる

メッセージ

4 みこころを知る道　ゴットホルド・ベック

8人の証し

30 求めよ、さらば与えられん　大江美恵子・山田公代

39 主のはかりごとだけが成る　タン・ジュンボ

43 主のご支配の中で　山田京子

50 私の救いの神にあって喜ぼう　鍋島直子

58 積み木の順序　竹原成典

65 驚くばかりの恵み　竹原通子

74 主との出会い　中村友紀

84 主は私の右の手をしっかりつかまえられました　今川三枝子

みこころを知る道

ゴットホルド・ベック

今回は「どうすれば、主のみこころを知ることができるか」について学びたいと思います。

「みこころを知る道」についてよりよく学ぶためには、ローマ人への手紙8章12節～17節および26節～29節、ピリピ人への手紙1章9節～11節、コロサイ人への手紙1章9節～11節、エペソ人への手紙3章16節～18節を読むことが有益です。結論から言えば、神のみこころは神の霊によって、ただ聖霊の働きによってのみ知ることができるということです。ですから、御霊に導かれる生活こそみこころを知る道なのです。以下では、(1)どうしたら御霊に導かれる生活をすることができるか、(2)どうすれば御霊の導きが分かるか、(3)主の導きに対する従順とその結果はどういうものか、について順に考えたいと思います。

1どうすれば聖霊に導かれる生活ができるか

聖霊に導かれる生活ができるために必要なのは、一つは「みことばを聞く備え」であり、もう一つは「みことばに従う備え」です。ダビデは次のように祈っています。

あなたのみこころを行なうことを教えてください。あなたこそ私の神であられますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。（詩篇 143・10）

ダビデは御霊の導きを求めて祈っていました。ダビデは主のみこころにかなった人でした。私たちも主に喜ばれる者になりたいなら、御霊に導かれる生涯に入ることです。新しく生まれ変わって主イエス様のものとなり、御霊を内に宿すことです。そして、ダビデと同じように「あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように」と心から、今日、新たに主の御前に祈りたいものです。

ダビデは「主よ、教えてください」と、いつも主の御前に教えを乞う態度でいました。このような人々は測り知れない主の祝福にあずかります。

生まれつき盲目であった男も、主イエス様の教えを乞うたのです。彼が「主よ。その方はどなたでしょうか。私がその方を信じることができますように。」（ヨハネ 9・36）と尋ねたとき、主イエス様はそれがご自身であることを教えなさいました。「イエスは彼に言われた。『あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。』彼は言った。『主よ。私は信じます。』そして彼はイエスを拝した。」（ヨハネ 9・37～38）

エチオピヤの宦官もピリポに教えを乞いました。「導く人がなければ、どうしてわかりましょう」と正直に求めたとき、宦官は救いにあずかることができ、喜びながら旅を続けました。

主の使いがピリポに向かってこう言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」（このガザは今、荒れ果てている。）そこで、彼は立って出かけた。すると、そこに、エチオピヤ

人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピヤ人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、いま帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。

御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われた。そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」と言った。すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう。」と言った。そして馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。

彼が読んでいた聖書の個所には、こう書いてあった。「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった。彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」

ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った。

それからピリポはアゾトに現われ、すべての町々を通って福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った。

（使徒　8・26〜40）

このエチオピヤ人は、みことばに対して聞く耳を持っていただけではなく、みことばを受け容れ、みことばに従ったのです。

パウロも回心をしてから、「主よ。私は何をしたらよいでしょうか」と主のみ前にへりくだって尋ねました。主は、パウロが行くべき道をはっきりとお示しになられたのです。

それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。

（使徒　16・6）

大地震によって牢の戸が開いているのを見た看守は、囚人たちがみな逃げてしまったと思い自殺しようとしたのですが、パウロとシラスに止められました。彼は「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」（使徒　16・30）と震（ふる）えおののきながら教えを乞いました。すると「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」（使徒　16・31）と素晴らしい救いのみことばを受けました。

これらの人々はみな、主のみことばを聞く備えができていました。また同時に、主に従う備えもできていました。主に従順な、柔らかい心を持っていました。

御霊に導かれること、御霊の導きがあるということは聖書の約束です。イスラエルの民もそれを経験しました。

そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光

みこころを知る道

が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕にはいることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。イスラエル人は、旅路にある間、いつも雲が幕屋から上ったときに旅立った。雲が上らないと、上る日まで、旅立たなかった。イスラエル全家の者は旅路にある間、昼は主の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があるのを、いつも見ていたからである。

（出エジプト　40・34～38）

御霊の導きの約束はダビデにも与えられています。

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。

（詩篇　32・8）

主イエス様も御霊の導きについて語っておられます。

しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。御霊はわたしの栄光を現わします。

（ヨハネ　16・13～14）

イスラエルの民が荒野を旅したとき、主なる神が雲の柱、火の柱をもって導かれたと同じように、すべての救われた兄弟姉妹は御霊の導きを受ける特権を持っています。

神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。

（ローマ　8・14）

御霊がイスラエルの民を導いていこうとなさった目的地は、実り豊かなカナンの地でした。そのように、御霊はいつも一つの目的をもって私たちを導こうとしておられます。

彼らを安らかに導かれたので、彼らは恐れなかった。

（詩篇　78・53）

また彼らをまっすぐな道に導き、住むべき町へ行かせられた。

（詩篇　107・7）

イスラエルの民が荒野をさまよったとき、いろいろなことが起こりました。一つひとつを見ると決して「安らかな道に導かれた」とは言えませんが、御霊は「最後に」カナンの地に導き入れてくださいました。それを思うと、御霊はご自分の民を安らかにお導きになったと心から言うことができます。

私たちの場合も、恵み深い御霊は、私たちが主イエス様の似姿に変えられるという目標に向かって導いておられます。

イスラエルの民の場合と同じように私たちも、一つひとつの問題や苦しみや悩みを見ると、主は私たちを棄てたのではないか、と疑ってしまうことがあります。しかし、先へ導かれてから振り返ってみると、過去に起きた病や悩み苦しみ、ありとあらゆる問題は御霊の導きだったと認めざるを得ません。

御霊が導こうとなさる目標に行きつくまでには、いろいろな問題が私たちの身に起こってくるでしょう。

問題が起こると祈ります。けれども結果が現われない場合があります。祈り会においても同じです。聖書を開いてみことばを学んで祈りますが、結果が現われません。なぜでしょうか。その理由は、これから祈ろうとすることが主のみこころであるということを確信していないからです。そのために祈りの中に「みこころならば、このようにしてください、あの

みこころを知る道

ようにしてください」ということばが出てくるのです。このような状態では、祈った後にも確信が持てません。誰かに「祈りは聞き届けられただろうか」と尋ねられると「それを願っています」としか答えられません。

しかし、主は、このような態度を求めてはおられません。聖書はまず、主のみこころが何であるかを教えていただいてそれを確信し、信仰による祈りを捧げなさい、と教えています。

エリヤは主のみこころを確信して立ち、権威をもって次のように言いました。

私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。

（1列王記　17・1）

エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように祈ると、三年六か月の間、地に雨が降りませんでした。そして、再び祈ると、天は雨を降らせ、地はその実を実らせました。

（ヤコブ　5・17～18）

エリヤの祈りは、聖霊に導かれた祈りだったからこそ聞き届けられました。私たちも御座にまで届く祈りをしたいなら、御霊に導かれる祈りを捧げなければいけません。

大切なのは「祈り」そのものではなく、祈る前に主のみこころを確信して立つことです。この確信を私たちに与えてくださるために、御霊がおいでになったのです。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

（ローマ　8・26～27）

真の祈りは、私たちを通して祈られる御霊の祈りです。御霊が主のみこころを教えてくださるとき、私たちは主イエス様の信仰をもって（ガラテヤ　2・20）祈ることができ、祈りが必ず聞き届けられるという確信を持つことができます。信仰と確信の欠乏は主のみこころを知らないところからきます。そのために、多くの祈りが聞き届けられないのです。

私たちは主のみこころをはっきり知るまで待ち望み、みこころを知った後に行動すべきです。モーセの場合がそうでした。まず主が語られ、次にモーセは主の言われたとおりに行動しました。パウロもまず主の御声を聞き、次にその御声に聞き従いました。主イエス様はいつも心の内にささやかれる父の御声に聞き従っておられました。

わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。

（ヨハネ　14・10）

主イエス様は実際に耳に聞こえる声、また周りに起こることがらによって導きを受けられたのではありません。大切なのは御霊が私たちの霊にお語りになり、私たちはそれを聞いて主のみこころを知って、確信して立つことです。

みこころを知る道

私たちを導くことのできるお方は聖霊だけであり、また御霊と聖書のみことばの間にいつも一致があります。御霊は「みことば」を用いて語りかけてくださいます。私たちが何か問題にぶつかっているとき、御霊は聖書のみことばを取り上げ、それを生かし、私たちの心に投げ込んでくださいます。内住の御霊が聖書のみことばを生かして語りかけてくださるのです。私たちを導くことができるのは御霊だけです。

私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。

（ローマ　8・16）

このみことばは信仰生活の始めだけでなく、信仰生活を送っていく間にも当てはまるみことばです。神の子どもであることを証してくださった御霊は、さらに私たちのうちに語りかけながら導いてくださいます。導きは内に住まれる御霊によってだけなされるのです。内住の主の導きは、主に救われたすべての兄弟姉妹に与えられている特権です。

2どうすれば聖霊の導きが分かるか

次に実際に何かの問題にぶつかった場合、どのようにして御霊の導きを知っていくか、五つの点に分けて考えてみましょう。

第一に、御霊の導きを求める場合、すべてのことは主の栄光のためであるということを知らなければなりません。

こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。

（1コリント　10・31）

もしこれを深く心に留めているなら、自分の思いや願いは問題ではなくなるはずです。まことの献身とは自分の意志をまったく主に明け渡し、日々その明け渡しを新たにすることです。この自らの意志を主に捧げた人だけが、御霊に導かれることができるのです。

主イエス様は完全に御霊に導かれたお方でした。主イエス様が間断なく、御霊に導かれた秘密は詩篇に書かれています。

わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。
あなたのおしえは私の心のうちにあります。

（詩篇　40・8）

この主イエス様の心の持ち方こそ、常に御霊に導かれる秘訣です。だからこそ主イエス様は次のように証しされたのです。

わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行なうからです。

（ヨハネ　8・29）

御霊に導かれるということは、ときには自分のいわゆる「良い意志」を捨て、主のみこころだけに従うことを意味します。これは決して簡単なことではありません。一つも罪を犯されなかった主イエス様でさえ難しく思われたほどです。主イエス様は十字架を前にしてゲツセマネの園で祈られました。

わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。…わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。

（マタイ　26・38、39）

みこころを知る道

主イエス様はこの苦しい祈りを父のみこころを行うためになさったのです。

マリヤも同じ態度をとりました。

ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。…そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。…マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。

（ルカ　1・31、34～35、38）

マリヤは主イエス様の母親になる心の備えがありました。もし結婚する前に身ごもるなら、（掟では）石で打ち殺されなければなりませんでした。その危険もかえりみず、ただ「主のみこころがなりますように！」と主にすべてを明け渡したのです。

霊の導きを受けるには、主の栄光を第一に求めるべきです。私たちも主イエス様やマリヤのような献身者になり、「人のごきげんとりのような、うわべだけの仕え方でなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない」（エペソ　6・6）たい、とパウロのように言うことができれば幸いです。主なる神に聞き従い、自分を捨てる備えのある人は、御霊の導きを受ける資格のある人です。この人々に与えられる祝福は豊かです。

若い兄弟姉妹は、結婚の相手を考えるときにも「主よ。私はあの兄弟（姉妹）を愛していますが、みこころでなければ思いを断ち切ります」という態度が必要です。私たちの心の態度が主の御栄えを第一にしているならば、主は私たちを豊かに導いてくださいます。御霊の導きを求めるには、すべてのものごとは主の栄光のためであるということを最初に知らなければなりません。

第二に、主の導きはいつもみことばにのっとっていることを知る必要があります。

御霊の導きは必ず神のみことばである聖書にもとづいています。したがって聖書知識は大切です。言うまでもなくこれは、救われるためではなく、成長のため、導かれるため、用いられるためです。主は「わたしの民は知識がないので滅ぼされる。」（ホセア　4・6）と嘆いておられます。また、「熱心だけで知識のないのはよくない。急ぎ足の者はつまずく。」（箴言　19・2）とも書かれています。

主イエス様はパリサイ人を叱って「読んだことがないのですか」と彼らの聖書知識を批判されました。

イエスは言われた。「ダビデとその連れの者たちが、ひもじかったときに、ダビデが何をしたか、読まなかったのですか。

（マタイ　12・3）

イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。」

（マタイ　19・4～5）

また、主イエス様は言われました。

イエスは彼らに答えて言われた。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです。」

（マタイ　22・29）

みこころを知る道

神のみことばに逆らう人には、御霊の導きはありません。もしただ一つのみことばでも、それと知りながら従わないなら、どんなに祈っても導きは与えられません。みことばに逆らうことは、御霊に逆らうことです。ですから、導きが与えられないのです。主は私たちにみことばを学ぶようにすすめておられます。

このみおしえを書き写して、自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。それは、彼の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行なうことを学ぶためである。（申命記　17・18～19）

主の書物を調べて読め。これらのもののうちどれも失われていない。それぞれ自分の連れ合いを欠くものはいない。それは、主の口がこれを命じ、主の御霊が、これらを集めたからである。（イザヤ　34・16）

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。（ヨハネ　5・39）

ここのユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。（使徒　17・11）

もしみことばが私たちの喜びとなり、楽しみとなり、いのちとなるなら大丈夫です。

あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。…どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょう。これが一日中、私の思いとなっています。…あなたのみことばは、よく練られていて、あなたのしもべは、それを愛しています。（詩篇　119・72、97、140）

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。（エレミヤ　15・16）

私たちの信仰生活はみことばを食べる程度に従って成長します。主イエス様をよりよく知り理解するのは、みことばによるのです。イエス様ご自身が私たちの心の奥底に入ることを願っておられます。主イエス様ご自身が、私たちのいのちのパンとならなければいけません。

みこころを知る道

聖書は、教理、学説ではなく、主のみことば、つまり主ご自身を啓示する書物です。ですから聖書を読むことは大切ですが、それは聖書を研究し、いわゆるキリスト教の教えを知るためではありません。主イエス様ご自身を知らせていただき、主イエス様との親しい交わりを得るためです。

主イエス様はパリサイ人に向かって、「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」（ヨハネ　5・39～40）と叱責されました。聖書を読むことといのちを得ることは決して別のものではありません。主はみことばをもってご自身を現わされます。主はいのちのパンです。主のみことばは、私たちにとっていのちのパンとならなければなりません。

みことばは私たちにとって何なのでしょうか。死ん

だ冷たい文字でしょうか。重荷でしょうか。それともいのちでしょうか。もし、生けるみことばが私たちの内に入るなら、必然的にいのちが与えられます。もし、聖書が私たちにとってただの掟であり、真理であるだけなら、それは私たちにとって重荷であり、不自由なものです。しかしいのちなら自由と喜びをもたらすものとなります。

聖霊の導きが分かるために、第一にすべては主の栄光のためにあるということを知らなければなりません。第二に、主の導きはいつもみことばにのっとっており、みことばにもとづいているので、みことばを食べなければなりません。

第三に、御霊の導きは「良心」、「理性」とも関係があることを知る必要があります。

私たちの良心は、主によって与えられたものです。もし、ある問題について良心が「これは良くない」と判断したら、御霊の導きを待つ必要はありません。また行くべき道が分からず迷っている場合、片方の道に行くのに平安がなければ、それ以上導きを求める必要もないでしょう。

良心とともに理性も主がくださったものです。多くのキリスト者が迷いのある信仰生活を送っているのは、自分の考えと主のみこころを混同しているからです。つまり自分の理性に頼って、主の導きを仰がないからです。かつてアブラハムは飢えを恐れて、自らの考えでエジプトへ逃れ、そこで罪を犯してしまいました。このことを通して聖書は、自分の理性で勝手に行動することの危険を教えています。

ある人々は、「理性は何の役にも立たない」、「理性は肉に属するものだ」と言いますが、これは間違いです。もし、理性が信者の内でしもべとしての位置をとるなら、理性は用いられる存在となります。しかし、理性が信者の内で支配者の立場をとるなら、間違った道へ導いてしまうでしょう。しかし、私

たちの内に住んでおられる御霊によって理性が支配されるなら、私たちは理性によって聖書を学び、真理を秩序だて、みことばを暗記することができます。導きは御霊だけがなされることであり、理性は御霊の導きを実現する道具のようなものです。

もし何か大きな問題にぶつかったなら、理性をもってあらゆる面から考える必要があります。前に述べた二つのこと、「どうしたら主の御栄えがあらわれるだろうか」、「この問題に当てはまるみことばがないだろうか」と理性をもって考えてみる必要があります。

しかし時には理性を抜きにして、御霊が直接「今、祈りなさい！」、「今、あの人に手紙を書きなさい」、「今、あの兄弟、姉妹を訪ねなさい！」と教えてくださることもあります。ピリポの場合がそのよい例です。ピリポはサマリヤの町々でみことばを宣べ伝え、非常に祝福されていましたが、あるとき御霊が「荒野へ行きなさい」、と導かれました。これはピリポの理性には逆らうことでした。サマリヤには求める人々が大勢いるのに、どうして人もいない荒野に行かなければならないのだろうと考えたに違いありません。しかし、ピリポは御霊の声に聞き従って荒野へ出て行き、エジプトの宦官に会って救いに導き、主の御栄えを拝することができました。

主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。

（1サムエル　15・22）

ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。「人に従うより、神に従うべきです。」

（使徒　5・29）

みこころを知る道

これらのみことばの中には、理性に従うよりは主なる神に従うべきである、という意味が含まれているに違いありません。パウロは御子、主イエス様の啓示にあったとき、血肉に相談せず、つまり人の理性に従わず、啓示に従ったと聖書は記しています。

異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき、私はすぐに、人には相談せず、先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。

（ガラテヤ　1・16〜17）

こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず…

（使徒　26・19）

主の導きを求めるとき、兄弟姉妹の忠告も助けになります。しかしそのためには集会に欠かさず集うことが大切です。その場合、集会に出る構えが大事です。もし、主のみことばを聞き、導きを求めたいという深い飢え渇きがないなら、何の役にも立ちません。

見よ。その日が来る。――神である主の御告げ。――その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渇くのでもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。

（アモス　8・11）

主の御告げ。――わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ。

（イザヤ　66・2）

主のみことばを畏れおののいて聞く者には、主は豊かな導きを与えてくださるのです。

第四に、聖霊の導きを知るには、主のご目的と御霊の導きは深く結びついていて、切り離すことができないということを知る必要があります。御霊に導かれて、主の目的に向かって歩んで行くことが大切です。もし、主のご目的が分かり、それが生涯の目標となるなら、私たちの身辺に起こるすべてのものごとは、益となって働くことが分かるはずです。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

（ローマ　8・28〜29）

主イエス様のキリスト者に対するご計画は、実に素晴らしいものではないでしょうか。主のみ旨が「コロサイ人への手紙」に要約されているので見てみましょう。「神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、」（コロサイ　1・19）とあります。また「キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」（コロサイ　3・11）と書かれています。

大切なことは、御霊の導きは「教会」つまり主イエス様に属する人々の群れに向けられていることです。教会を通して主なる神のご目的が現わされ達成されていくからです。

旧約時代のイスラエルの民に対しては、主の導きは「幕屋」において現されました。エジプトを脱出した後、主はモーセに幕屋の構造を詳しくお教えになったので、御霊に満たされた人々の手によって、主の指図通りに幕屋ができあがりました。このと

き主は見える幕屋の裏に霊的な意味を持たせ、それを私たちに教えようとなさったのです。この見える幕屋になぞらえられる霊的な幕屋とは、主イエス様とご自分のからだである教会のことにほかなりません。

イスラエルの民の場合、幕屋と主の導きは密接な関係がありました。御霊を象徴する雲の柱、火の柱が上がると民は出発し、雲の柱が下るとそこにとどまり、導きのままにイスラエルの民は歩んだのです。幕屋の上に雲の柱、火の柱が降り立ったように、主イエス様のからだなる教会に御霊がお下りになりました。私たちが主のみこころにかなった教会であるならば、主は私たちを思いのままに導くことができるのです。

もし雲の柱によって導かれた幕屋がなかったなら、イスラエルの民は約束のカナンの地に入ることができなかったでしょう。それと同じように、教会なしには主の満たしに入ることはできません。他の兄弟姉妹との交わりなしに、霊の満たしに達することはできません。私たちに対する主の個人的な導きは、多かれ少なかれいつも主の目的と教会に関係があるのです。主のご目的である「御子の内に満ち満ちた徳を宿らせる」という事実に心の目が開かれ、またこの目的を達成するために教会が道具として存在しているのだ、ということを知ることができたら幸いです。だいぶ難しくなってきましたが、これを分かりやすく言っているみことばをいくつか読んでみましょう。

こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。（コロサイ　1・9）

キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。（コロサイ　2・9～10）

そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。（コロサイ　3・11）

また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ　1・22～23）

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。（エペソ　4・13）

このようなみことばから、主のみこころが何であるかが分かります。どのようなことでも御霊の導きは神の目的に深いつながりがあるのです。主の関心は、私たちの病や問題がたちどころに解決されることではなく、それらを通して、主のみこころが私たちの内になされていくことです。主が望んでおられることは、私たちが今、幸福であるということではなく、主のみこころが私たちの内に完成されることです。この目的のために御霊が遣わされ、私たちを導こうと望んでおられるのです。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてく

ださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。（ローマ　8・26～29）

ここまで御霊の導きについて四つのことがらを述べてきました。もし何かの問題にぶつかったらこれらのことを思い浮かべ、御霊の導きを求めましょう。そのときに大切なのは、第五番目、「こころの静けさをもつ」ということです。

リーダーズ・ダイジェストに一つの絵が載っていました。それは一人の信仰者が部屋の中を往ったり来たりしている絵で、まるで檻に閉じ込められたライオンが暴れているようでした。絵の中で、誰かが「どうしてそんなに忙しくしているのですか」と尋ねているのですが、それに答えて「私にはどうしても解決しなければならない問題があるので、休む暇がないんです。でも、神様はノンビリしていてちっとも急がないらしい」とありました。

もし主の導きがはっきり分からなかったら、主の前に静まり、「わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。」（詩篇　32・8）と言われる主のみことばを、信じて待ち望むことです。悪魔はいつもせかせます。けれど主はいつも余裕をもっておられます。主の御前に問題のすべてをありのままに広げて、静かに主の御声を待ち望むことが大切です。

問題があるとき、そのことだけを考えていろいろと思い煩うと、主の御手が働かれるゆとりができません。私たちが問題すべてを主におゆだねして解決を求めるとき、主は豊かにお応えになるのです。同時に御霊は私たちの霊に確信を与え、「これがあなたの行くべき道だ」と教えてくださるはずです。

主の御前に静まることは、自分のもっている問題をすべて主に明け渡すために必要です。主の御前に静まることは、人混みの中であっても、混んでいる電車の中であってもできることです。このとき大切なのは、「幼子のように」ということです。素直に主にゆだねたら、主の答えを強制しないことです。

私たちは主のしもべとして主の御声を聞く特権をもっています。人間の使用人でさえ、主人の言いつけを聞く権利を持っていることを考えれば、当然のことです。

みこころを知る道

待ち望むときにも、与えられた務めを忠実にまっとうすることが必要です。またそれまでの導きに従順に従っていなければ、主はさらなる道へ導くことはできません。

主のみこころを知る方法として、「これだ」と言えるものはありません。あるときは目に見えることによってお導きになります。しかし、急に状況が変わり、行くべき道を見失ってしまい、思いがけない所に道が開ける場合があります。パウロがそうでした。彼は小アジヤの伝道を禁じられ、ヨーロッパに遣わされました。

それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。それでムシ

ヤを通って、トロアスに下った。

ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください。」と懇願するのであった。パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤに出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。

（使徒　16・6～10）

あるときには友人の便りにより、またあるときには本により、御霊が働いて私たちを導いてくださる場合もあるでしょう。また御霊が一つのみことばを取り上げ、これこそ主の御栄えを表す道であり、この道を行くべきだと示してくださることもあるでしょう。いずれにしろ、御霊は私たちについには確信を与えてくださいます。そのとき、主ご自身の平安が私たちの魂を支配し、不安と恐れはすっかり消えてなくなってしまいます。

キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。

（コロサイ　3・15）

確実に言えることは、導きの方法が何であれ、御霊だけが私たちを導くことがおできになるということです。御霊の導きによって主のみこころを知ることができるなら、私たちは確信をもってそのみこころをなすことができます。

私たちはもうすでに主イエス様にあって勝利を得ているのですから、これから勝利を得るために努力する必要はありません。勝利を得ている者として、主の勝利を伝えていきたいものです。アブラハムはそうしました。

彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。

（ローマ　4・18～21）

また、主イエス様は言われたのです。

あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに告げます。もし、からし種ほどの信仰があったら、この山に、「ここからあそこに移れ。」と言えば移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはありません。

（マタイ　17・20）

3 主の導きに対する従順とその従順の結果について

御霊はただ一つの目的をもって私たちを導いてくださいます。その目的は私たちにとって、主イエス様がすべてのすべてとなられ、私たちが「主と同じかたちに姿を変えられて」（2コリント　3・18）いくことです。

私たちとは違い、御霊はすべてを知って導いておられます。霊的な成長は、御霊の導きに従順であることによってなされます。従順であるなら、さらに豊かに御霊に満たされていきます。しかし、従順であることによって、私たちが特別な賜物を受け、いわゆる幸福な生涯へ導かれるとは限りません。従順に従

う者には御霊が与えられると約束されていますが、聖い御霊の存在は、「古い人」つまり、私たちの生まれつきの性質にとってはありがたくないことだからです。ヨハネは「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」（ヨハネ　3・30）と言いましたが、古い性質が消え、自分を無視し、謙遜の谷に下るということは決して楽ではありません。御霊に導かれるということは、私たちの本来の性質に反することです。御霊に導かれていくとき、自分の醜い性質、つまり「自分を義とすること」、「悪に染まりやすいこと」、「赦せない心」、「人目につきたがる性質」といったものがあらわにされてきます。

主イエス様は、父なる神に従順に従った結果、孤独になり、誤解され、ついには十字架にかかられるというものでした。もし御霊に導かれるままに従順に歩むなら、主イエス様、使徒たち、また多くの聖徒たちが経験したように、私たちも苦しみに会うことでしょう。

主イエス様は十字架にかかられる前に次のように祈られました。

わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。

父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。

（ヨハネ　17・14、24）

また、昇天された後、主イエス様は天より御声をかけて、次のようにおっしゃいました。

勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。

（黙示録　3・21）

御霊が導いてくださり、パウロが証ししたように「キリストの心がある」と、心から言えるようにしてくださったら幸いです。

いったい、「だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。」ところが、私たちには、キリストの心があるのです。（1コリント　2・16）

このように言えるようになったら、御霊はさらに私たちを導いて、御座におられる主イエス様のもとに導いてくださるのです。

みこころを知る道

求めよ、さらば与えられん

大江 美恵子 ・ 山田 公代



左から山田公代さん、大江美恵子さん

この証しは、今年百二歳の大江美恵子姉が八十六歳の時に吉祥寺集会の「学び会」で証ししたものをテープから書き起こしたものです。

わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。（イザヤ　46・3～4）

私は、一九一三年一月四日、岩手県一ノ関で生まれました。男二人、女四人の六人兄弟、祖父母、両親の大家族で、父は町役場に勤めており、平凡ながら家族仲の良いおだやかな環境で育ちました。女学校卒業後、できることなら東京に行ってみたいと思い、母の

賛成もあって上京し、飯田橋のタイプライターの専門学校で学びました。そこで知り合った尾鷲出身の友人に主人を紹介されました。主人は父の性格にどこか似ていて、誠実で正直な方だと思い、結婚を決心しました。主人はその頃、満州の新京にあった商事会社に勤めていました。私は結婚のため一人で海を渡り、一九三八年に二十五歳で結婚式を挙げました。今、一人でよく行ったな、と思っています。一九三九年に長男暢博、一九四一年に長女公代が与えられました。

新京ではのびのびと穏やかで幸せな生活でした。しかし、太平洋戦争が始まり、「ぐずぐずしていると帰国する時機を失う」と主人が言いましたので、二人の子供をそれぞれがおぶり、子供に必要なものだけをもって追われるように、また名残惜しく連絡船に乗りました。船室はすでに灯火管制で薄暗く、魚雷攻撃に備えての訓練もあり、緊迫した空気の中で、恐怖で息を潜めておりました。神戸に着いた時は本当に安堵しました。

一九四三年、次男の洋が生まれました。戦後、無一文になった私たちは主人の故郷三重県尾鷲に引き揚げました。田舎とはいえ物資は乏しく、日々の生活は本当に大変でしたが、空襲がなく、電気をつけることができたことは、何か重しが取れたように思えました。田舎でも闇物資がありましたが、私たちには買うお金もなく、ご近所との助け合い、また知恵を出し合うことによって、何でも手作りし、貧しいながらも将来に向かって希望をもって歩みだしました。

主人は社会福祉の一環として保育園設立の仕事に携わりました。私は、自分の育った環境や風習とまったくちがう土地で、自分を守るために、また人に気遣うあまり、自分自身にも他人にも正直でない自分に自己嫌悪し、疲れ果て、日々の生活すべてがなぜかむなしく、確かなものを求める思いが募っていきました。

一九四九年、長男が十歳の頃、尾鷲の教会でボーイ

スカウトが結成され、長男の希望で入会させました。この時、ざら紙に印刷された文語体の小型の聖書をもらいました。聖書を初めて手にしてパラパラ目を通して読んでいるうちに何かジーンと心に感じ、「これは大切な本なんだ、大事にしなければ」と思い、いつか教会に行ってみたいなと思いました。隣の教員住宅におられた小学校の女の先生と親しくなるうちに「教会に行ってみませんか」と誘われました。三十八歳のクリスマスに、初めて教会に行きました。

教会では、「求めよ、さらば与えられん。さがせよ、さらば見つからん。叩けよ、さらば開かれん」と大きな字で書かれた言葉が目に留まりました。求めて与えられるものって何だろう、よくわからないけど教会に行ってみよう、と思わされ、何か心に灯がともったような気持ちになりました。しかし教会に行くことは大変勇気のいることでした。昼間は家を空けにくいので夕拝に行ってみました。夕拝は求める人もなく、ほとんど牧師夫妻と私の三人だけでした。でも、薄暗い会堂で賛美歌とみことば、祈りを通して、経験したことがない心温まる慰めや安らぎ、励ましをいただき、暗い夜道を喜びのうちに走るように帰っていました。しばらくの間、教会に通いたいとは主人に言い出せずにいましたが、やっとの思いで話すと、「自分の事なんだから、行くからにはイエス様に信念をもっていけよ」とだけ言われました。私はほっとし、うれしく、強い味方を得たような気がしました。

教会生活は充実し、交わりも楽しく、聖書もよく読みました。ある時、牧師の説教から、ルカの福音書15章4～7節の、迷い出た一匹のわがままな羊は私であり、羊飼いなるイエス様は私が見つかるまで捜しつづけてくださっていたことを知りました。十字架上で流されたイエス・キリストの血潮は私の罪のためであったことがわかって、私のわがままの罪の心からの悔い改めをイエス様が喜んでくださっていることを知りました。

あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。（1ペテロ　2・25）

私が六十八歳の頃、三重県久居（ひさい）に住む次男の嫁ヨシさんが大腸がんで入退院の末、十一歳、八歳、四歳の三人の娘を残し、三十七歳で召されました。このことは私のそれまでの人生で最もつらく悲しい出来事でしたが、ただただ安らかにと祈るばかりでした。しばらくの間、久居と尾鷲を行ったり来たりしていましたが、体も神経も疲れ果ててしまい、主人、息子と相談の上、三人の孫たちを手元に引き取ることになりました。孫たちをかわいそうに思い、この時を何とかして乗り越えなければ、と自分の力で頑張り、疲れはてました。主人は何事にも協力してくれましたが、私は自分の時間がないことが辛く、苛立ち、嘆く者でした。このような私でしたから、召されていったヨシさんにも孫たちにも一番大事なイエス様のこと、天国のこと、与えられる希望のこと、何一つ伝えられなかったのです。ヨシさんは、召される前に「治ったら、おばあちゃんと一緒に教会に行くわ」と言ったことが、今も忘れられません。その後、息子は再婚に導かれ、孫たちは親元に帰りました。

あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

私は教会に通い続けていましたが、教会では牧師

と役員とのいさかいがありました。牧師より長老が上に立つという不穏な空気の中、いたたまれなくなった牧師が出ていかれたこともありました。その頃（一九九一年）、教会から吉祥寺キリスト集会に導かれた娘の公代から「光よあれ」や兄弟方の福音メッセージのテープ等、次々と送られてきました。暗闇に覆われていた私自身の信仰にも主がはっきりと光を当ててくださったのです。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。（詩篇　119・130）

長く通っていた教会を出る決心をしました。名古屋集会は遠くてなかなか通えませんでしたが、時折名古屋や東京から兄弟姉妹がおいでくださり、家庭集会を開いていただき、主の導きに感謝しました。

主人は市会議員、福祉の仕事を終えて、一九八四年七十二歳の時膀胱（ぼうこう）がんになり、人工膀胱の不自由な生活となりました。主人は、教会へは行こうとしませんでしたが、自宅での家庭集会では率先して準備を手伝い、兄弟姉妹との交わりも大変喜んでいました。鈴鹿でのキャンプ、御代田でのコンサート、また上京の折りには家庭集会にも喜んで参加しました。キリスト集会の責任者であるベック兄と初めてお会いした時、「ベックさん、僕は無宗教です」と手を挙げて叫ぶように言いましたが、ベックさんは「それは良かった、僕と同じだね。かしこかったね、お父さん」と言われ、大笑いになりました。主人は、「宗教ではない」と言うベックさんの言葉を深く心に留めているように思いました。十年余りの人工膀胱の生活でいろいろ大変なことがありましたが、何一つ愚痴を言わない、涙もろい優しい人でした。元気な時、近くに住む甥に、「わしが死んだら葬儀はキリストでやってくれ」と言い置いてもおりました。最善の時に、主は主人を八十三歳で永遠の故郷へ召してくださいました。ベック兄始め東京、名古屋の兄弟姉妹も大勢尾鷲においでくださり、自宅での葬儀となり、家族、親せき、友人、知人と大勢の方が出席してくださいました。

通夜のあと家族だけで過ごしていましたら、それぞれの思いの食い違いからか口論となり、その時、主にあってのみ家族の一致があることを知らされました。主人の墓標には「わが国籍は天にあり」と刻みましたが、このみことばは主人にピッタリと思ってうれしくなります。

この世にあっての全存在であった主人が召され、私は、心にぽっかり穴が空いたようで頼りなく、寂しくて寂しくて仕方がありませんでした。葬儀の後ベックさんに、「ベックさん寂しいがな」と言ったら、ベックさんは、「お母さん、もっともっと寂しくなるよ、御代田に来るといいよ」とおっしゃいました。

尾鷲での一人暮らしは、聖書のみことばに支えられ、慰め励ましをいただき、天国で主人と再会できるとのお約束を楽しみに過ごしておりましたが、その後、東京の娘のすぐ近くのマンションに移り、二年余りになります。今は礼拝、家庭集会、兄弟姉妹との交わりの中で、まだ救われていない家族一人ひとりの救いを祈りながら一歩一歩、歩ませていただいています。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。（エペソ　2・8）

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。（2コリント　5・1）

8 人の証し

Unser HERR lebt

ここまでが母八十六歳の時の証しです。その後の十五年間、主に守られて過ごしてまいりましたが、決して平たんな道のりだけではありませんでした。

娘の私（公代）は、七年前に生死をさまよう大病を患いましたが、その時も母は、主に祈りみことばに支えられ、落ち着いていました。それまでは私が母を集会に連れていっておりましたが、この時から兄（暢博）と主人が同行するようになり、それがきっかけで兄も集会の方々と交わるようになったことが母の大きな喜びでした。母は、いつも忙しそうに生活している兄に「静まりなさい。聖書のみことばは真理だよ」と言い続けていました。母は、二〇〇八年一月、自ら特養「そよ風」に九十五歳で入居しました。

兄暢博は、この年の一月十五日の田中順治兄の母上喜美子姉妹のご葬儀に導かれ、その様子に深く感銘を受けたようでした。母に、「すべてがよかった、ベックさんのメッセージも素晴らしかった、あんたもあのようなお葬儀にしたらいいね」と言っていました。二月五日の夕には「そよ風」に行き、何度も母と賛美歌を歌って帰っていきました。その翌日、二月六日、兄が自宅で急逝し天に召されました。兄の死は、母にとっては思いもしないショックでしたが、気丈に受け止めていました。吉祥寺集会で葬儀をしていただき、兄にかかわってくださった多くの方に福音をお伝えする時をいただきました。母は、「私が暢博を天国で迎えるはずだったのに」と悲しみに沈んでおりましたが、その都度みことばとお祈りを通して慰められ、希望をいただいて、「イエス様、私もはやく天国に行きたいです」と祈っていました。

彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

（黙示録　21・4）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・28）

母は、「そよ風」に入居したあと、一緒に祈れる姉妹がこの施設に入ってきてほしいとずっと祈っていました。主は祈りにこたえてくださり、一人二人三人と入居され、祈りと交わりをいただいております。

母の妹で松本にいます島田喜和子叔母（八十八歳）は、二年余り前、母を訪ねて母の部屋に泊まった帰り際、「どうしたらお姉さんみたいになれるの」と言い出し、そこにいた私たち家族も共に賛美とお祈りをし、涙と喜びのうちに帰って行きました。そのあと、御代田キャンプでベック兄との交わりに導かれ、救いの確信をいただきました。すぐに仏壇を閉じてみことばを飾り、今は長野の兄弟姉妹との交わりもいただいて、喜んで過ごしております。最近は電話で、母と叔母はイエス様のことを喜び、語り合っています。

二〇二年、集会の松見とみえ姉妹が「そよ風」に来られた時、母の部屋で音楽のお好きなおばあさまと賛美歌を歌ったのがきっかけで、賛美歌や懐かしい唱歌などを歌う会が始まりました。今は「賛美歌を歌う会」と名前を改め、ごく自然にお茶の交わりの前には母がお祈りするようになりました。集会の姉妹方も加わってくださることもあって感謝です。母はこの会を今は何より待ち遠しく楽しみにしています。

二〇一五年一月四日で百二歳を迎えた母は、年相応に混乱することもありますが、自分で聖書を開き、「みことばは真理やね」とみことばと祈りを喜び、良い笑顔になります。私はそんな母が愛らしく大好きです。みことばは母の特効薬となっています。「家族も十字架の下にみんな集まったらいいね」と言って、一人ひとりの名前を挙げて祈っています。施設の人々に

も愛されて「感謝しかないね」と口癖にしています。私たちにとってこのような母と、こんなに長く一緒に過ごすことができる日々の恵みは、イエス様の尽きないご愛と憐れみと感謝しています。「求めよ、さらば与えられん」のみことば通りに御霊をいただいた母は、天国を待ち望んでいます。

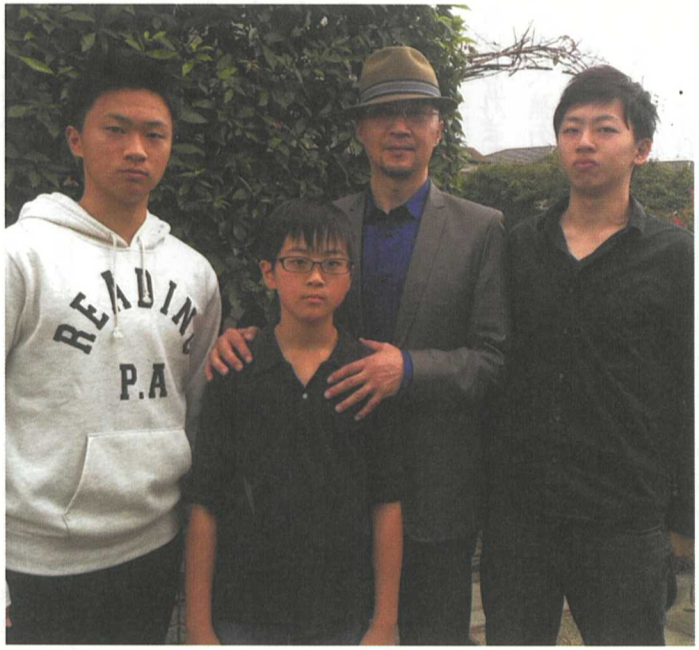
大江美恵子
一九三年　岩手県一ノ関生まれ
岩手県立一ノ関高等女学校卒業
一九三八年　大江義次と満州国新京にて結婚
終戦後夫の故郷三重県尾鷲に引揚げ、夫の昇天後上京、現在に至る。

家族
夫　大江義次（一九九四年昇天）
長男　大江暢博（二〇〇八年昇天）
次男　大江洋
長女　山田公代

山田公代
一九四二年満州国新京で生まれる。
三重県尾鷲市立矢浜小、尾鷲中学、県立尾鷲高校、池坊短期大学卒

主のはかりごとだけが成る

タン・ジュンボ



左から次男の真さん、三男の晃さん、ジュンボさん、長男の寛さん

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

私は一九六三年、中国の南京で生まれました。子供のときは、中国は毛沢東の時代で、毛沢東が神であり、イエス・キリストのことは聞いたこともありませんでした。南京芸術大学を卒業してしばらくしてアメリカの大学へ行きました。キリスト教系の学校でしたので聖書の授業があり、毎週日曜日には教会のクワイヤ（聖歌隊）で歌わなければなりませんでした。私の英語力は乏しくて説教の内容は全然分かりませんし、せっかくの休みの日曜の朝早く起きることは嫌でしたが、ここで初めて聖書の話を聞きました。

その後、続けて声楽の勉強をするためにインディアナ大学へ行き、そこでピアノを学んでいた現在の妻、

京子に会いました。この後、一度にいろいろなことが起こされました。

まずブッシュ政権になって、予想以上に早くグリーンカードが取得でき、アメリカ国外に出てもまた入国できる資格を得られたこと、京子の体調が悪くなり日本に帰ることになったこと、そしてもうひとつは私の父が末期の肺がんであると分かったことでした。ワシントンDCにいる母からの電話で父の病気を知り、病院へ行くと父は何も食べることができず、日に日に痩せていきました。医師からはあと一カ月の命と告げられました。この時初めて私は、人間は何もできない、無力だと感じました。

父がアメリカに来てからの一年間、近くの教会へ通うようになったのを私は大変驚いていました。どのようにしてかは知りませんが、父が家族の中で一番初めに救われました。召されるまでの短い入院生活中、父は大変な痛みに苦しんでいました。ところが教会の兄弟姉妹が訪ねてきて聖書を読み、お祈りしてくださるときは、ふつうに目を開けて幸せそうでした。一体どんな力が彼を強め、幸せにしているのか、私には分かりませんでした。ほとんど話すことのできない父が一回だけ「私はおまえの結婚を見ることはないだろう。主がおまえに一番良い妻を与えてくださるように願っている」と言いました。私は息子として、父の助けとなることを何一つできないことを、本当に辛く思いました。父の病を通して主の聖霊が初めて私に触れました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

末期がんの父を背負って南京へ帰りました。父の死の二週間前でした。京子が南京へ父に会いに来ました。南京の空港に現れた京子を見て、信じられない思いでした。もう二度と会うことはないと思っていたからです。すべてが主の完全なご計画と今は分かります。このとき初めて私は京子との結婚を考えましたが、京子は「私は主イエスを信じる人としか結婚できない」と言いました。私は父の死を通して、神様以外に本当の幸せと平安を与えてくれるものはないと思いました。

一九九四年、ニューヨークで集会のキャンプが開かれたとき、ベック兄にお会いしました。京子との結婚のことを話すと、「あなたは主イエスを信じますか?」と聞かれ、私は「イエス様は私の救い主です」と答えました。ベック兄は二人の結婚のことを主の御心が成るように祈ると言ってくださり、二年後、吉祥寺集会で結婚式に導かれました。

結婚後私たちはニューヨークに住みました。ここではメトロポリタン歌劇場で合唱団員として仕事をし、五年後東京へ移りました。初めての日本での仕事は、集会の兄弟がくださったパンを焼く仕事でした。すべてが新しい経験でパン焼きを学ぶのは楽しかったですが、慣れない仕事で体はきつかったです。

もともと悪かった膝の状態が悪化して仕事を辞めなければなりませんでした。その後しばらく仕事がなくて妻と祈る時間をたくさん頂きました。実際のところ日本には歌を歌う仕事はあまりありませんでした。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

（詩篇　121・1～3、7～8）

いろいろなオーディションを受けましたが仕事はなく、主が私に何をさせようとしておられるのか分かりませんでした。知人から教えてもらって新国立劇場でオペラの合唱団のオーディションを受け、合格した時はうれしかったです。私が初めての外国人でした。ここでは二年に一回のオーディションがあり、一年ごとの契約で仕事を頂きます。主は私たちの必要なものをくださいます。

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。（箴言　19・21）

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。（ピリピ　4・6〜7）

私の親戚、職場の方々、友人たちの救いを祈っています。

タン・ジュンボ　南京芸術大学声楽科卒業
ウィットワース大学音楽学部、インディアナ大学
ニューヨーク・メトロポリタンオペラ合唱団員を経て、
現在、新国立歌劇場合唱団員
妻・京子　長男・寛　次男・真　三男・晃

主のご支配の中で

山田　京子



夫のジュンボさんと

私は一九六七年、東京の高井戸で長女として生まれました。初めてイエス様にお会いしたのは幼稚園の頃でしょうか。毎年、夏休みには母の実家である三重県の祖父母の家で長く過ごし、祖母に日曜学校へ連れて行ってもらうことは楽しみのひとつでした。祖父母の家にあった子供向け聖書物語を読み、イエス様が私たちの罪のために十字架につかれたこと、イエス様にお祈りして謝（あやま）ったら天国へ行けることを知って、ひざまづいて真剣に祈ったことを覚えています。

神様の存在は素直に信じていたものの、幼いころから私は、時間が刻刻と過ぎていくのを止められないこと、自分の人生がどこに向かって行くのか分からないという恐ろしさに悩まされていました。

家の中は落ち着いており、両親は愛情深く育ててくれましたので、これは環境から来るものではなくイエス様のくださった私の弱さだったと思います。母

は忍耐強く穏やかな人でしたが、家族が病気になったり何か事が起こると心配する母を見て、子供心に「大人でも不安なんだ」、と感じていました。

幼いころから心のよりどころとなる絶対的なものを求めていましたが、成長するにつれ、ゆるがない頼れるものを自分の中に確立しようとするようになりました。このため、学校の成績、四歳から習い始めたピアノ、さまざまな友人との関係などを、自分が納得する状態に保つためにすさまじく努力しました。自分を完全にコントロールすることができなければ崩壊してしまうという恐ろしさから、長く摂食障害にもなりました。

近くの教会にも長く集い、二十歳のときに洗礼を受けました。神様を信じ祈ってはいましたが、神様は私の考え、計画を支えてくださるお方であると思っていました。その当時は、神様に支配していただく、ということにはまるで考えは及びませんでした。

人は心に計画を持つ。主はその舌に答えを下さる。あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。

（箴言　16・1、3）

音楽大学を卒業し、もっとピアノを学びたいという思いが募り、素晴らしい教授陣がいると聞いていたアメリカのインディアナ大学に留学しました。想像していた以上に内容の濃い授業やレッスンに喜びも大きく、これこそ私が求めていたものだと、勉強にまい進していきました。現在の夫、タン・ジュンボ（ボボがニックネームですので以下ボボと書きます）に大学のキャンパスで出会ったのはこのころです。自信にあふれ、好き嫌いのはっきりしたキツイ人に見えましたが、後々、自分の将来を考えると不安だったと聞きましたので、そのような態度で弱さをガードしていたのかもしれません。

このころ東京では、母が教会を出て吉祥寺キリスト集会へ集うようになっていました。母からの喜びいっぱいの手紙とともに集会のメッセージの本やテープが送られてきましたが、当時の私には母の喜びは理解できず、また本やテープも私には必要なものとは思えませんでした。しかし、単位を取り終えると、いつまでここで勉強を続けるべきかしだいに悩むようになりました。音楽の学びに終わりはなく、かと言って仕事に就くことも容易ではありません。父は、留学を続けて良いと言ってくれましたが、何のために音楽を学ぶのか、目的は何かと考え始めると、留学を続ける十分な理由は見出せませんでした。自己満足を得るためだけに努力を続ける・・と思うと、空しくてたまりませんでした。体調を崩し始め、思うようにピアノの練習ができなくなり、あせるばかりでした。クリスマス休暇で帰国した際には、だるくて起き上がるのが辛いほどになっていました。病院で精密検査をしましたがどこも異常はなく、ある医師は「ゆっくり温泉でも行ったら」とおっしゃいました。「何も悪いところがないわけがない！こんなに具合が悪いのだから」と心の中で叫びましたが、もうアメリカへ戻れる体調でないことは認めざるを得ず、この思いもかけない展開に私は呆然とし、足元がガラガラと崩れて行く思いがし、初めてようやく自分の愚かさに気づきました。

体調ひとつ変えることができないのに、自分で人生を切り開いていかなければならないと考えていたこと、何事も決定権は自分にあると思っていたこと。あまりに傲慢で愚かな自分に愛想がつき、「神様に白旗をあげよう！」と思いました。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。主はあなたの足をよろけさせず、あ

なたを守る方は、まどろむこともない。
（詩篇　121・1～3）

何もできない状態になって初めて、先々の計画を立てて実行しなければ、という強迫観念から自由になることができました。自ら進んで主に信頼し委ねるということはまだできませんでしたが、以前のように自分に頼るということはなおさらできませんでした。

しばらくして、少しずつ体調が戻りはじめ、ボボに電話してみようと思い立ちました。具合が悪いからアメリカに戻らないと伝えたきりでした。私がイエス様にお会いできたことをいつか話せたらと思ったこともありましたが、これは説明して理解してもらえることではないし、もう会うこともないと思っていました。久しぶりに電話で聞く彼の声は沈んでいました。「たった今、母からの電話で父親が末期の肺がんであると分かった。京子が以前、死がすべての終わりではないと言ったことを思い出しているんだ」というのです。「今だ、今だったらイエス様のことを話せる」と思い、中国語の聖書と「実を結ぶ命」を持って南京へ帰るボボを追うようにして、中国へ渡りました。

病室で会ったボボの父はやせ細っていましたが、アメリカにいた時に教会へ通い、すでに救われておられ穏やかでした。教会の牧師がたびたび病室を訪ねられ、賛美歌を歌いお祈りなさるのをボボも聞いていました。牧師が廊下で「私はね、彼の息子（ボボ）に福音を聞いてほしくて、それも見舞いの目的のひとつなんだよ」と私に耳打ちされました。私が日本へ発った日にボボの父は天に召されましたが、「私にはイエス様がいるからなにも心配はない。おまえの将来の伴侶も神様が与えてくださるように」と最後にボボに話したそうです。これらの一連の出来事を通して、ボボは神様の存在を信じるようになりました。

二年後の一九九六年に結婚に導かれるまでは様々な困難がありましたが、それは私がさらに主に信頼し、委ねて行くことを教えていただくために必要な期間でもありました。ニューヨークで友人とアパートをシェアしていたボボと、東京にいる私は結婚について祈り始めました。ベック兄に相談すると、①信仰、②両親の承諾、③男性には仕事があること、が必要と言われました。①の信仰は共にできても、父は結婚に大反対でしたし、当時のボボはレコード店で時給五ドルのバイト生活でした。父の反対理由は、ボボに定職がなく音楽での仕事は不安定だと思われること、また二人ともに異国のアメリカで生活することの困難さ、でした。父親として当然の心配ですが、私は何という頑固な父か・・・と思っていました。考えてみると私の希望に断固父が反対したのは、この時が初めてでした。

一年間このような状態が続き、始めに話しました祖母が「心機一転、日本で仕事を見つけたらどうか、まずお父さんに相談してみなさい」と言ってくれました。ボボからは電話で「この結婚が神様の御心でないなら僕たちにはどうしようもない。僕はもう神に祈ったから」と現在進行形でなく完了形で言われ、「あぁ、これは私の思いではなく主の決められることだ」と、主におまかせするしかないことをはっきり示されました。こうして父に、「彼に仕事はないし、日本で仕事を探すことも考えたけれど、お父さんが許してくれなければ結婚しない」と話すことができました。夕食のテーブルでしたが、私が話した後も父は数分ただ黙っていました。これでこの話は終わったのかと思っていると、「分かった。結婚しなさい。できる限りサポートするから」と言ってくれ、その時から現在に至るまで、その言葉通り私たちの生活を最大限見守ってくれていることを感謝しています。

その後、日本での職探し・・・と思った矢先、ボボがニューヨークのメトロポリタン歌劇場のオーディション

に受かったことが分かり、先ほどのベック兄のお話しにあった②両親の承諾と③仕事の二つが与えられて、一九九六年、吉祥寺集会にて結婚へと導かれました。

結婚後、予想していなかったさまざまな問題がありました。私は観光ビザで滞在していましたが、観光ビザが切れる三カ月ごとにアメリカを出て日本を往復していたのです。しかし、長男が与えられてからのたびたびの長いフライトは大変でした。

また、メトロポロタン歌劇場での最初の一年間は仕事が少なく、彼は引き続きバイトをしなければなりませんでした。でも、「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ　6・33）のみことば通り、私たちにはいつも主の備えがありました。当時ニュージャージーにいらした酒井兄姉宅で、北米とカナダを電話回線でつないだ礼拝が毎週与えられ、ニューヨーク、ボストンでのキャンプでも豊かな恵みを頂きました。

結婚三年後に次男を与えられ、ボボは夫として父親としてこのままニューヨークにとどまるべきかどうか悩みました。というのもメトロポリタン歌劇場で正規団員として入るまでは収入が不安定であること、またこの時バスの歌手が一人やめ、次は自分が正規団員として入れると思っていたところ、別の方が入られたからです。集会の兄弟が「ボボさん、日本に来ることになったら仕事をあげるよ」と言ってくださっていたこともあり、メトロポリタンのマネジャーに日本へ行くことを考えていると話すと、「次にバスのパートに空きがでたら君を入れるからそれまで待って欲しい」と言われましたが、それが何年先になるか分かりません。さんざん悩み、兄弟姉妹にも祈って頂き、日本へ行くことを決断しました。祈って彼が決めたことに主は必ず責任を取ってくださると思いました。

今、日本に来て十四年になります。三男も与えられ、私自身、ピアノを教える仕事も頂き、忙しさの中、私のもともとの性質、自分の生活を計画通りに進めたいという思いに支配されがちです。家族、夫と主にあって向かい合う時間がなく過ごしてしまうことが多く、先ほどのマタイのみことばで、第一にすべきものが第一になっていないことをたびたび示されます。

そのような中、母の大病を通して父も救われ、ますます主の御約束の確かなことを見せていただきました。周りの親戚も一人ひとり導かれ、イエス様が必ず祈りを聞いてくださることを知り、感謝です。

私自身ではなく、主が私をいつもご支配してくださいますよう、祈っています。

山田京子
都立大泉高校、武蔵野音楽大学、アメリカ・インディアナ大学音楽学部演奏ディプロマ修了